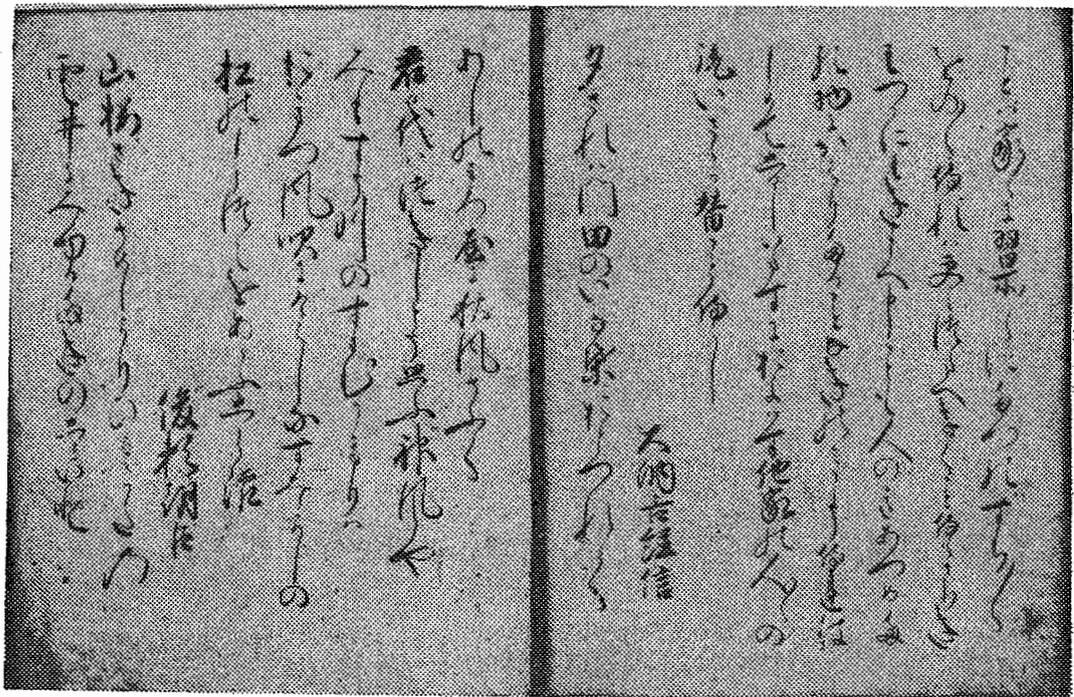


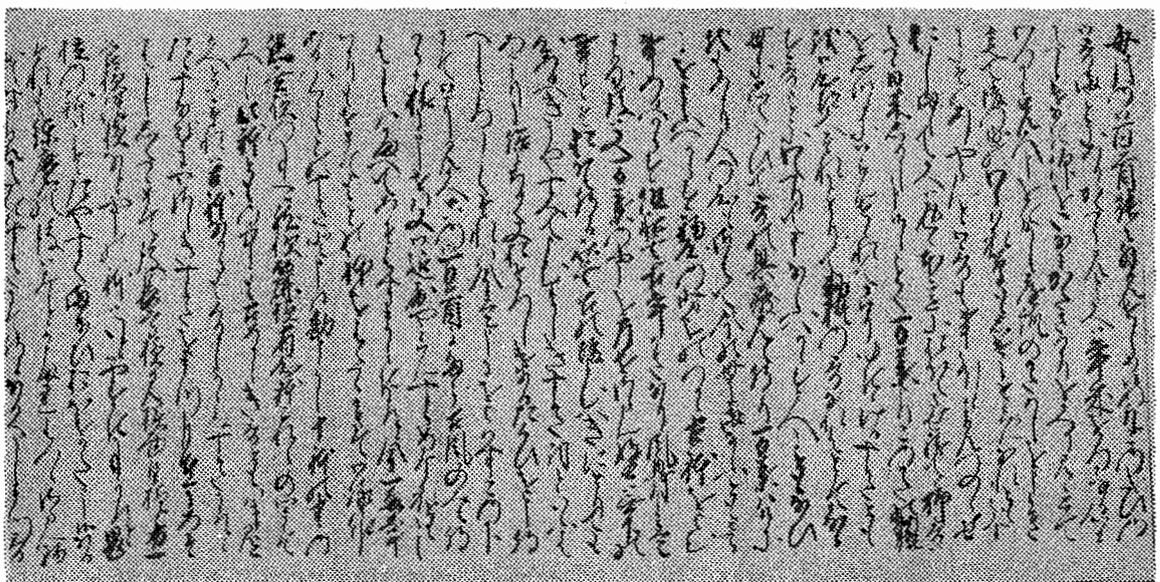
第13回特別展示

中世歌論書展

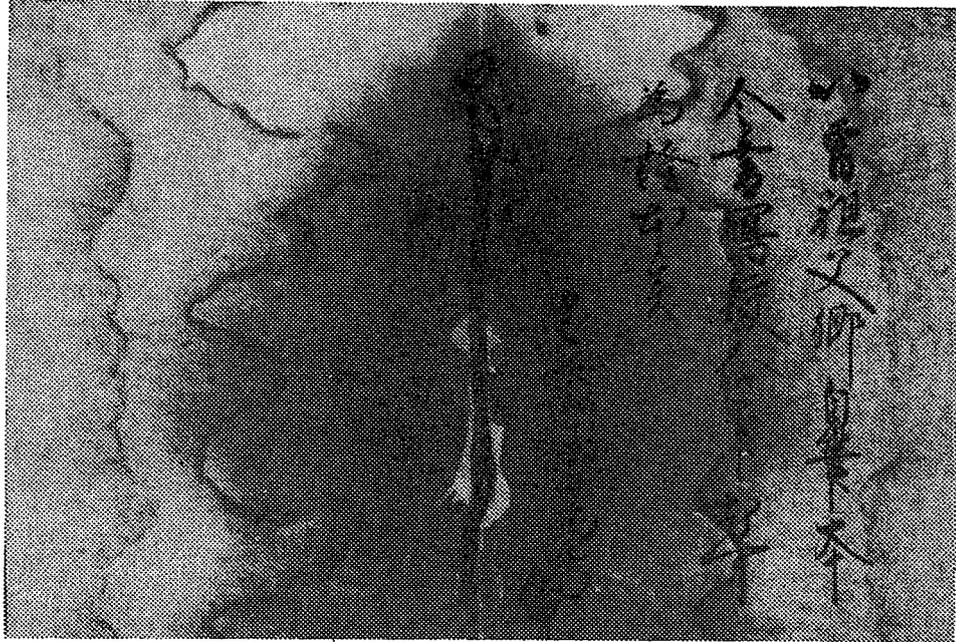
— 久松家寄託資料 —



1 近代秀歌



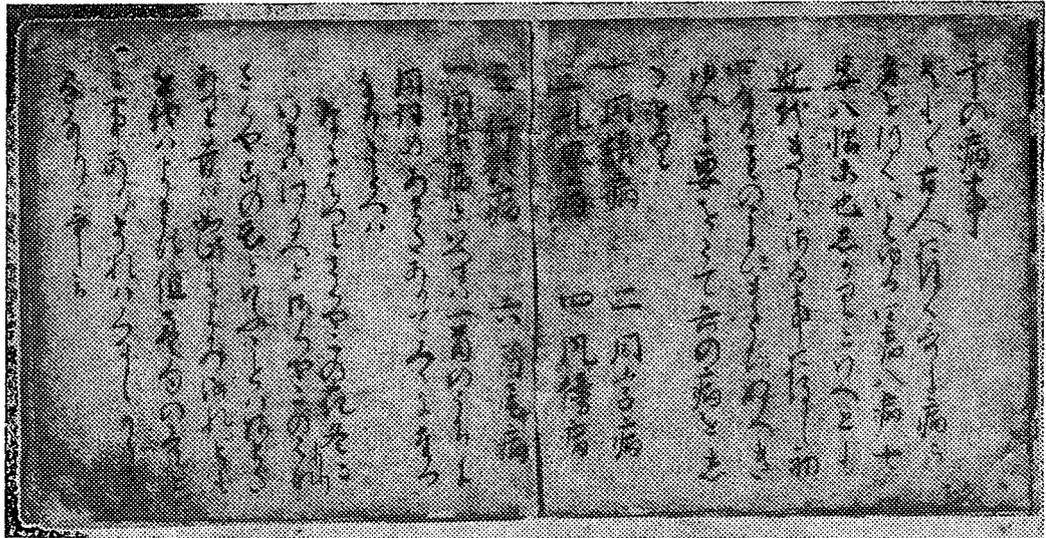
3 毎月抄



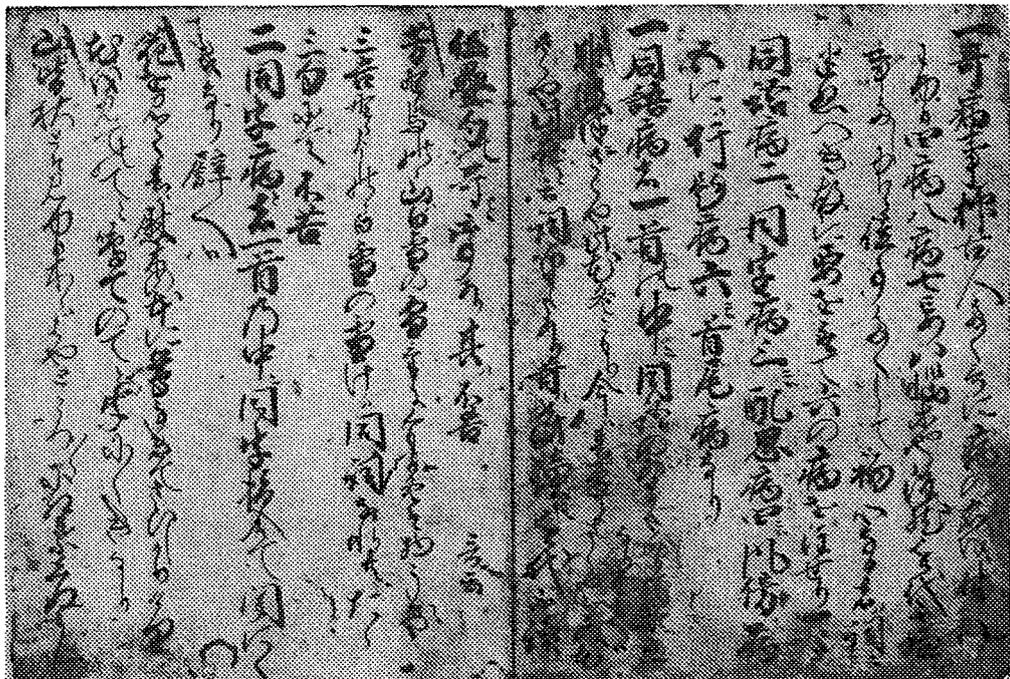
8 詠歌大概



9 詠歌大概



26 竹園抄



27 竹園抄

はしがき

国文学研究資料館では、昭和五十二年の開館以降、国文学研究の進展に寄与することを念じて、常設展示（年三〜四回。期間、約三ヶ月間）と特別展示（一〜二回。期間、一週間乃至二週間）とを開いて参りました。

このたび、第十三回特別展示「中世歌論書展―久松家寄託資料―」を十一月一日より十五日まで、日曜祝日を除く十二日間開催いたします。当館が寄託を受けている故久松潜一博士所蔵本の中心をなす中世歌論書六十四点の展示であります。

これはその目録であり、末尾に久松家寄託資料一覧を添えました。多くの研究者に御利用いただければ幸いです。

昭和五十八年十一月一日

国文学研究資料館長 小山 弘 志

凡例

一、この目録は、国文学研究資料館第13回特別展示「中世歌論書展——久松家寄託資料——」の展示資料解説目録である。

同展は、昭和五十八年十一月一日（火）～十五日（火）の十二日間、当館展示室において開催し、故久松潜一博士所蔵の久松家寄託資料より中世歌論書を選んで展観するものである。

一、収録した資料は、出展全点計六十四点である。

なお、久松家寄託資料全点の一覧を巻末に添えた。

一、目録の記載は、原則として、次の順序によった。

書名、刊写年、大きさ（単位はcm—解説文中も同様）、巻冊数、請求記号。

解説は、初めに著者名等（同一作品については、初出の資料のみ）。次に、表紙・題簽、装訂、料紙、丁数・行数・字詰め、奥書・識語、印記。そして、伝本、作品内容その他について記した。ただし、同一作品に複数資料がある場合には、伝本、作品内容等については、適宜分散して各所に記した。

一、解説は参考室が担当した。諸先学の研究に負うところが多く、『和歌文学大辞典』（明治書院）や『日本歌学大系』（佐佐木信綱・久曾神昇編、風間書房）、そして、とりわけ『和歌文学辞典』（有吉保編、桜楓社）には、多大な恩恵を受けた。その他、論文等、一々お断わりしなかつた部分も多いが、記して感謝したい。

31	竹園抄 (慶安三年写)	14	49	雨中吟 (江戸中期写)	23
32	竹園抄 (延宝七年写)	15	(四) その他の中世歌論書		
33	竹園抄 (江戸中期写)	15	50	八雲御抄 (江戸初期写)	24
34	竹園抄 (嘉永七年写)	16	51	和歌口伝 (江戸中期写)	24
	(三) 仮託偽書		52	延慶両卿訴陳状 (江戸末期写)	25
35	和歌肝要 (正徳三年写)	16	53	井蛙抄 (江戸初期写)	25
36	悦目抄 (室町末期写)	17	54	愚問賢註 (江戸前期写)	26
37	悦目抄 (江戸中期写)	17	55	愚問賢註 (江戸前期写)	26
38	愚見抄 (天正十四年写)	18	56	正徹物語 (室町末期写)	27
39	三五記 (江戸中期写)	18	57	正徹物語 (江戸初期写)	27
40	三五記 (江戸中期写)	19	58	正徹物語 (寛文二年写)	28
41	愚秘抄 (室町後期写)	19	59	正徹物語 (元禄七年写)	28
42	愚秘抄 (江戸中期写)	20	60	正徹物語 (文政二年写)	29
43	愚秘抄 (江戸中期写)	20	61	古今伝授切紙口伝 (江戸後期写)	29
44	桐火桶 (承応二年写)	21	62	幽斎聞書和歌雑集之抜書 (江戸中期写)	29
45	桐火桶 (江戸中期写)	21	63	細川幽斎聞書 (寛文五年刊)	30
46	桐火桶 (宝永元年刊)	22	64	柿本備材抄 (安土桃山頃写)	30
47	和歌十躰 (江戸前期写)	22		久松家奇託資料について	32
48	未来記 (江戸前期写)	22		久松家寄託資料一覽	33

(一) 定家歌論と注釈

1 近代秀歌(長祿元—一四五七—年写)縦二七・四×横二一・一 一冊

1158

共表紙。左肩に「秘々抄」と直書する。仮綴。料紙は美濃紙。墨付二二丁。一面八行、一行一七字程。奥書は

「此一帖相伝申者也 了俊判」「此一帖松月軒徳翁之愚身相伝如此也／正清／此一帖不慮令感徳者也／文龜元_西下

春 (花押)「長祿元年十一月廿六日／重而書之」と記す。文龜元—一五〇—一年奥書は別筆で、伝領に関わるも

のであろう。よつて了俊から松月軒徳翁(＝正清＝正徹の元名)、すなわち正徹(長祿三—一四五九—年没、七九

歳)が相伝したもので、それを長祿元年に重ねて正徹自から写したものと考えられる。印記は「久松蔵書之印」

(これは原則として全資料にあるので以下は略す)「月明荘」とある。近代秀歌は、承元三—一二〇九—年に、源

実朝の求めに応じて書き送ったものだが、現存する自筆本は承久の乱—一二二—年頃までに定家自身が改編した

ものと推測されている。よつて今日見る伝本はその後の加筆などによつて、流布本系・自筆本系など凡そ五系統に

分れ、本書はそのうち、流布本系と自筆本系とを併せた形の秘々抄本系に属する。猶、本書の前半は和歌史批判か

ら新風樹立を説き、後半は、本歌取り論を展開している。

2 近代秀歌(近世前期写)縦二六・四×横一九・七 一冊

1116

横目赤香色の紙表紙。左肩に「和歌秘伝抄 全」と記す白紙銀箔散らしの題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙。墨付

七〇丁、巻頭遊紙一丁。一面一二行、一行二三字程。『近代秀歌』『正風体抄』『毎月抄』『八雲口伝』(詠歌一体)

『阿仏口伝』（夜の鶴）『近来風体抄』を一冊とするもので、いわゆる『和歌六部抄』本である。これは遣送本の近代秀歌で、細川幽齋もこの六部を特に重視し常に座右に備えたので、『幽齋座右抄』『幽齋座右銘』等といい、かなり流布しており、伝本上流布本系に区分されているものである。猶、伝本は、従来、一類（原形本系）、二類（流布本系）、三類（自筆本系）、四類（秘々抄本系）、五類（定家十体包括本系）に区分されていたが、最近もう一類を立てるべきか否か問題の本が出て来ている。

3 毎月抄（室町後期写）縦二六・八×全長約五四五・〇 一軸

香色地に菊唐草を織る金襴表紙。卷子本。料紙は鳥の子で間二合で裏打ちされている。全一五紙（初め二紙に「和歌九品」、次に「毎月抄」）に末尾に一紙の余白。一行二〇字程。奥書は「承久元年七月二日 或人返報云々」以被草本為備後生之用心聊染筆候也 藤原朝臣為家（判）」と諸本にみえる為家のものがある。書写奥書はないが、道増親王（元龜二―一五七一―年聖護院門跡）筆と伝えられるものである。これは信じ難いとされるが、書写は室町のその頃と判断される。日本古典文学大系「歌論集」所収本の底本となったものである。猶『毎月抄』は、定家（著者）のもとに、ある身分ある歌道初心者から、送られてきた百首の詠草を批評し、返送する際に添えられた書簡の形をとる。内容は、様式分類としての十体論、及び、「有心体」を中心に詠歌態度論に重点を置いて述べたもので、詠歌技法を説く。『近代秀歌』『詠歌大概』と相互補完的位置にある。

4 毎月抄（江戸初期写）縦二五・八×横一六・五 一冊

黒地に牡丹唐草雷紋繋ぎの空押しのある紙表紙。左肩に「毎月欠」の白紙題簽の跡あり。また、見返しに「毎月抄 奥遠嶋し」とある。袋綴。料紙は楮紙。墨付四七丁。一面九行、一行二一字程。「夜の鶴」「遠島御書」（後鳥羽院御口伝）「毎月抄」を合写したもので、「毎月抄」巻末に「承久元年七月二日或人返報云々 被草以本為備後生

之用心聊染筆畢 藤原朝臣為家 以相伝秘本具令書校合訖 尤可為証 左少將藤原朝臣為秀」と記す。諸本は毎月抄本(甲)と、和歌庭訓本(乙)——凝然・通秀・宋瑛の奥書のあるもの——に二大別され、更に、甲は、為家の奥書のあるもの、為家為秀の奥書のあるもの、為秀以後の奥書のあるもの、に区分されている。本書は、鵜鷺系偽書との関連等から偽書ないし存疑説があるが、伝来上、真作とみるものが通説化している。

5 毎月抄(享保二〇——一七三五一年写) 縦二七・二×横一九・四 一冊

11 20

砥の粉色の紙表紙。左肩に「毎月抄」と記す題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙で裏打ちされている。墨付一六丁。

一面一〇行、一行二三字程。奥書は「建武四年五月十日——(略)——桑門凝然 文明九年三月五日(略)——特進源

通秀 同十七年小春上九——(略)——桑門宋瑛在判 以異令読合訖可為尤証本歟」と和歌庭訓本系の奥書に続いて

「享保二十年乙卯八月書写之 度会常彰」と記し、また朱で「古語探秘抄五 六部集中卷ノ両書此ノ奥書ノ次ニ左ノ歌アリ たれ

かみん世に数ならぬみつくきのあとにははかなきすさひなりとも」と記され、朱による、校合がなされ、朱の合点も

多く記されている。書写者の常彰は、ツネアキラ久志本氏、神職で『日本国風』『神道明弁』等の著がある。宝曆二——一七五

二一年七月没、七七歳。

6 毎月抄(江戸後期写) 縦二〇・四×横一二・九 一冊

11 21

茶色の布目地の後補の紙表紙。左肩に白紙に「毎月抄 翠石署以合」と記す題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙。墨

付二〇丁。一面八行、一行二二字程。奥書は、普通にあるものがなく、「右鎌倉右大臣実朝公江従定家卿被仰上候

写也 文明九年三月五日以或秘本令書写之和歌之秘伝猶道之奥旨也雖為流布之抄受不可勉料尔者乎 特進源通秀」

と記される。印記は他に、「伊集院蔵書」「芝胤？文庫圖書之印」の朱印がある。伝本上、奥書から和歌庭訓本の奥

書の通秀の部分の変形であるから、その周辺に位置されるのかとも思われる。

7 秀歌躰大略（江戸初期写）縦二三・一×横一七・二 一冊

11 30

紺地に金泥雲霞に水草・水蓮を描く紙表紙、見返し網目繫ぎ金箔。題簽なく、内題に「秀哥之躰大略」と記す。列帖装。料紙は鳥の子。墨付四〇丁。頭尾遊紙各一丁。一面一〇行、一首三行書き。奥書なし。『二四代集（定家八代抄）』に依拠して学ぶべき理想的風体としての秀歌を抄出したもの。本書は注を付された形態のものである。猶多くは、『詠歌大概』に付載される形で伝来する。たぶん、『詠歌大概』と一体で存在したものであったらうから、本書のように、独立しての伝来は、何らかの特殊事情によるものであろう。

8 詠歌大概（南北朝期写）縦一八・二×横一三・二 一冊

11 109

香色地に、金・銀・藍・樺等で梅・藤・撫子等を織る金欄表紙、見返し網目金箔で、後補になる。題簽なく内題に「詠歌之大概」とある。列帖装。料紙は縦内曇の鳥の子。（但、中央部分がやけてもろくなっている。）墨付二〇丁、卷末に遊紙四丁。一面五行。一行一二字程。（但、付載の「秀歌之躰大略」は一面七行、一首二行書き。）卷末に「以曾祖父卿自筆本令書写校合畢、尤可為証本矣 左兵衛督為秀（花押）」と、曾祖父（定家）自筆本を写したと為秀の書写奥書がある。また、古筆了珉等の極札も添付されている。『中世文学』（昭38・6）に翻刻・解題されていて数多い本書の伝本中でも、古いもので影印本が刊行されている。

9 詠歌大概（室町前期写）縦一七・〇×横一七・〇（榊形本） 一冊

11 113

栗皮色紙表紙―左肩に朱で「定家卿十躰」と書く後補の題簽を付す。見返し銀箔。また箱書には「秘書百箇条」と記される。列帖装。料紙は鳥の子。墨付五五丁。一面八行。一行一二字程（他は一五字程）。『下官集』『和歌十躰』『近代秀歌』『詠歌大概』を合写したもので、末尾に「永正十六年八月廿一日十回」と別筆で記すのは、伝領奥書と認められ、少なくとも永正十六（一五一九）年以前、おそらく室町前期の書写と思われる。この『詠歌大概』

は、仮名書きになる伝本で、数多い伝本中では少ないもので、京都大学図書館蔵平松家旧蔵本、陽明文庫本等五本が知られるにすぎない。これは真名本を意識的に改竄したもので、二条・冷泉どちらにも属さない傍流の人の作為ともいわれている。

10 詠歌大概（延徳四―一四九二―年写）縦二三・一×横一五・〇 一冊

1107

香色地に藍・標等で牡丹唐草を織る緞子表紙。見返し網目金箔。列帖装。料紙は鳥の子。墨付三〇丁。一面六行、一首一行、または一四字程。『百人一首』につき『詠歌大概』『秀歌之躰大略』を記す。奥に「写本云此一冊法印経賢筆跡也尤可為証本歟 法印堯孝判」とあり、ついで「以家本権律師梁盛所令書写者也 延徳四年十月廿三日 法印堯惠（花押）」と記す。経賢は、^{きょうけん}頓阿の子、南北朝末の二条派歌僧。堯孝は、頓阿の曾孫で『新続古今』編纂時の和歌所の開闔で康正元―一四五五―年没。梁盛・堯惠はともに堯孝の門弟で歌道相伝の人である。奥書のいう時の書写とみてよかる。印記は「倉野蔵書」「倉野珍藏」「月明荘」がある。猶、百人一首には朱墨（別筆）で集付、秀歌躰大略も集付、作者名を入れる。また、秀歌躰大略は百三首よりなるが、「もゝしきのおほ宮人はいとまあれや桜かざしてけふもくらしつ」が「桜花さきにけらしな足曳の山のかひよりみゆる白雲」のつぎになっている。

『詠歌大概』は、心と詞の問題、本歌取りについての心得、学ぶべき古典の問題などを簡潔に説いた作である。

11 詠歌大概（明応四―一四九五―年写）縦二四・四×横一七・四 一冊

1111

鶯色地に菊唐草繋ぎ紋を織る緞子表紙、見返し網目金箔。外題なく、内題に「詠歌大概」「秀歌躰大略」とある。列帖装。料紙は鳥の子。墨付一一丁、遊紙一丁。一面八行、一行一二字前後または一首一行書き。奥書に「此一帖藤原有宗依懇望染愚筆者也 明応四年三月日 法印堯（花押）」とある。印記は、他に「月明荘」のもの。猶「秀歌躰大略」は百三首よりなる。奥書中の藤原有宗は不詳だが、法印堯は、「堯憲・堯惠何かだが、後者の可能性が

高い。」(『中世歌壇史の研究室町後期』井上宗雄著)とされている。

12 詠歌大概(室町末頃写) 縦二五・七×横一八・二 一冊

1110

表紙は料紙と共紙。左よりに「中納言為氏卿御筆」と直書する。列帖装の一折のみ。料紙は鳥の子。墨付九丁。一面九行。一行二七字程。裏表紙左下に朱で「嘉永六八禾八予求置之」と記し、右下に「清水谷」と同じく朱筆が入る。嘉永は伝領記述、為氏は信じ難く、室町末期もしくは江戸初期の書写とみられる。「秀歌躰大略」は百二首からなり、七首目の、「山ざくらさきそめしより久かたの雲るにみゆる滝の白糸」が欠けている。また「夕暮は雲のはたてに物ぞおもふ天つ空なる人を恋ふとて」が「ゆふされば雲のはたてに物ぞおもふ」云々となっている。

13 詠歌大概(室町末頃写) 縦一二・三×横一六・一 一冊

112

梨地に金箔霞引きの紙表紙。外題なし。列帖装。料紙は雲母引きの鳥の子。墨付三三丁。末尾遊紙あり。一面一三行、一首一行書き。「詠歌大概」「秀歌躰大略」の他に「百人一首」「三十六人哥仙」「新歌仙三十六人哥」「中古三十六人歌合」「新三十六人歌合」を合写したもので、箱書に「松花堂筆」と記されている。松花堂は、近衛信尹・本阿弥光悦とともに寛永の三筆と称された滝本坊昭乗(天正二二―一五八四)寛永一六一―一六三九)である。松花堂は、御家流から入り空海の書風に迫った人で、書風にも変化があるようだ。箱書を信じないにしても、安土桃山あたりを軸にその前後の時代の筆跡であろう。

14 詠歌大概(室町末写) 縦一八・四×横一六・〇 一冊

1108

表紙なし。箱書に「詠歌大概 堯憲筆」とある。列帖装。料紙は鳥の子。墨付七丁。一面一〇行、一行一八字程。または一首一行書き。奥に「持主片桐門三良 寛永十九年三月吉日」とあるが、これは別筆で、伝領の奥書きであり、本文書写はこれより古い。この本は「秀歌躰大略」の歌が六三首で「あすも来む野路のたま川森こえて色なる

浪に月やどりけり」からもるともに苔のしたにはくちずしてうづもれぬ名をみるぞかなしき」まで四十首を脱している。堯憲は「堯孝門弟法印也即堯孝養子実清水谷公知二男哥道伝授」（顕伝明名録卷六）という。ならば、堯憲は実久（明応七—一四九八—年没。六七歳。権大納言）の弟の可能性が高い。

15 詠歌大概（慶安四—一六五一—年写）縦二七・六×横一八・九 一冊 11 10

紺色の紙表紙。左肩に「詠歌之大概」と直書する。袋綴。料紙は楮紙。裏打ちされている。上部一〇センチ程余白を残す。墨付三七丁。一面九×十一行、一行十×十九字程。「詠歌之大概」「秀歌之躰大略」「未来記」「雨中吟十七首」「百人一首」を合写している。奥に「愚拙所持本御奥書云々、右詠歌大概去年依所望書与之今茲未来記雨中吟百人一首依懇望染筆蓋卅一字之喉襟二条家之同足者乎 永禄五孟春下澣 三条丙殿法名 仍覚称名院殿 御判」とあり、次に一丁遊紙。裏見返しに「慶安四辛卯年吉日度会貞末（花押）」と記す。印記は、他に「橋村氏図書記」とある。永禄五—一五六—年、三条西公条の奥書のある本を、用いたのである。貞末は、あるいは、伊勢平氏の貞興（天正十一—一五八二—年六月十三日山崎合戦討死）の子「長門守」（系図纂要）とある人でもあろうか。

16 詠歌大概（江戸中期写）縦二三・九×横一八・五 一冊 11 3

丹表紙（かなり擦れている）。袋綴。料紙は楮紙、裏打ちされている。墨付八丁。首尾各一丁の遊紙。一面七×九行。「詠歌之大概」と「秀歌躰大略」からなっており、奥書はないが江戸中期頃の書写と考えられている。秀歌之躰大略の歌は百三首あるが「百敷のおほ宮人はいとまあれや」の歌がない上に、歌に出入が認められている。

17 詠歌大概抄（江戸初期写）縦二三・一×横一七・二 一冊 11 1

紺地に金泥で雲霞・水草・蓮を描く紙表紙。見返し網目金箔。外題なく内題に「詠歌大概抄」とある。列帖装。料紙は鳥の子。墨付二三丁、首尾遊紙一丁。一面一〇行、一行一八字程。傍訓が入る。本書は「詠歌大概聞書」「大

綱抄」「大綱記」とも称し、三光院内府（三条西実枝）の講釈を細川幽齋が天正一四（一五八六）年に書き記したものである。北岡文庫に幽齋自筆本が伝来する他、寛文八（一六六八）年刊本が流布している。これは、上巻を『詠歌大概』の注に、下巻を『秀歌之躰大略』の注にあてている。『詠歌大概』には多くの注釈書があり、宗祇注が現在のところ最も古く、その後の実隆・公条・宗養・紹巴らの注釈書に影響を与え、本書にも祇注として引用され、さらにこれを源として近世の数多い注釈を生み出している。

18 詠概大概抄（江戸後期写）縦二七・一×横一九・〇 一冊

11 112

茶色の紙表紙。左肩に題簽の跡痕がある。内題は「秀歌之躰大略」奥書き中に「大綱抄」と記す。下小口に「秀歌大略積下」とも記すが、『詠歌大概抄』の下巻のみ、『秀歌之躰大略』の注の部分である。袋綴。料紙は楮紙。墨付五六丁。一面一二行、一行二八字程。注部分二字下げ。奥書は「天正十四曆八月下旬 丹山隱士玄旨」「右一冊徳大寺前内相公以愚本可被証写云々孤陋之私抄雖非無其恐先哲之御説何敢有其憚乎俛応尊命終令遂賢写給耳 天正十五年十二月四日 二位法印玄旨（花押）」……中略……于時文禄乙未歲孟冬上澣 法印玄旨（花押） 右大綱抄者以徳大寺内府公維之筆法印玄旨自筆奥書之本片時写留之者也 一品宮竜淵王以御本写之」と記す。朱で書入れがある。玄旨（細川幽齋）自筆奥書本を、徳大寺公維（天正一六一一五八八一年没、五二歳。）が写した物を写したのが竜淵王本であろう。竜淵王は未勘。

19 詠歌大概鈔（江戸中期写）縦二五・三×横一八・一 一冊

11 5

白地に紺で竹に雀の紋様を散らす紙表紙。左肩に「詠欠大概鈔」と記す白紙題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙。墨付七七丁。一面一二行、一行一九字程。内題には「詠歌大概 後水尾院勅講鈔」とある。後の四分三程は「秀歌之躰大略」の注。奥に「右本文者以偏照寺二品親王真蹟校合朱点入者也 奥書 以相伝秘本曾祖父京極入道中納言定家卿筆 具 令書写

校合然尤可為証本矣 左兵衛督藤原朝臣 為秀 如此アリ八行書哥二行書」と朱で校合奥書がある。また上部に余白を残し若干の頭注が入る。印記は他に「阿彼国文庫」他がある。後水尾院（慶長元—一五九六—年生、寛永六一—一六二九—年讓位、延宝八一—一六八〇—年没）が講義した作である。院は、智仁親王・烏丸光広・中院通村等を召して古典を講義させ、自らも他に『拾遺集抄註』『伊勢物語聞書』等の著作を残す他、元和勅版の刊行、修学院離宮の造営など、文化史上にも重要な事跡を残された。

20 詠歌大概秘抄（正徳三—一七一三—年写）縦二一・四×横一四・五 一冊

11 11

瀝青色の紙表紙。左肩に「溪雲院殿御説詠歌大概秘抄」と直書きす。袋綴。料紙は鳥の子。墨付五三丁。一面一五行。注二字下げ。「詠歌大概」「秀哥之躰大略」の注で奥に「正徳三癸辰年二月十一日書終（花押）」と記す。（他に三種の印記がある。）溪雲院殿は中院通茂（寛永八一—一六三二—宝永七—一七一〇—）である。後の四分の三程を「秀歌之躰大略」に充てている。巻頭から「詠歌之大概」此書ハ尊快親王哥ノ読方ヲ定家卿ヘ尋ネラレシ時カキテ進シ申／サレタル書也扱題号ノ事 後水尾院御抄ナトニモ種々説アレトモ畢／竟ハ之ノ字入タルニテモ無難ト也 仮令外題ノ様ニ成来リタルニヨリテ／之ノ字入不レ入ノ説アリサレドモ外題ニハアラス奥ニモ秀哥之躰大略／トイヘルト同事ニテ只名目ヲアゲタルハカリ也／詠 増韻ニ詠ハ謳吟也漢朝ニテハフシツケテウタウヲ詠ト云日本ニテハ哥ヲ読出ス處ヲ詠ト云也……」とつづく。

21 詠歌大概註（江戸後期写）縦二七・〇×横一九・一 一冊

11 7

茶色地の紙表紙。左肩に題簽の跡あり。内題に「詠歌大概」。袋綴。料紙は楮紙。墨付五二丁、本文一面六行、注は一二行。一行二三字程、一首一行書き。末尾に「本山純信」と記す蔵書の整理印がある。最初に本文、次に「此抄の作者」「此抄の発起」「此抄の時代」等々の注が入る。奥書の類はない。通例、「秀歌之躰大略」の注

をも含むのだが、本書は「詠歌大概」のみの注である。因みに、巻頭から「詠歌大概／此抄の作者／京極黃門定家卿／此抄の発起／後鳥羽院第七御子尊快法親王梶井宮／此抄の時代／定家卿二条院保元元年壬午ミツノヘトマ誕生俊成卿四十九歟／此抄梶井宮にをせらるよし後光厳院ノ時人頼阿の抄にのす是則／尊快法親王の御事也然者此抄に耄味の覚悟に／随て書連ぬるのよし載之尤老後の事たるべし／貞応元イ元年壬子六十一歳なり彼よりも後の事たるへきか」そして、各文字毎に、説文等を引き注し、和歌之濫觴事、に言及する等、瑣末な部分にも言及が多い。

22 詠歌大概抄箋（文化五十一一八〇八一年序刊）縦二七・三×横一七・六 一冊

116

紺地の表紙。左肩に題簽の跡あり。書名は序題による。袋綴。料紙は楮紙。全六七丁。一面九行、一行二〇字程。「詠歌大概」の注、四九丁、「秀歌之体大略」一八丁からなる。巻末に「松月亭蔵」とある。序によれば、「詠歌大概」は後世歌道の模範となるべき書なのに等閑に付されている。それは古学の流行による、古学者は歌に志ぶかくなく先達を軽んずる傾向がある。二条家の教えをうけるものでも、あまり顧みない情況がある。そこで、出版したというのである。また注も、玄旨法印の抄の繁雑な部分は省略し不足部分には自説を加え、仮名遣は契沖の説によったという。序の末は「文化五年二月 源興詩」ととじる。著者は金谷興詩オキウシ、伴蒿蹊に歌学を、中村章庵に漢学を学ぶ、大阪の人で天保六一一八三五年、六二歳で没している。他に『八代集摘註芳野百首』『難波津百首』の作が知られる。

(二) 為家歌論と『竹園抄』

23 詠歌一体(江戸中期写) 縦二一・六×横一八・一 一冊

1117

白地に紺・標・金等で幔幕に菊・牡丹・紅葉を織る鍛子表紙、左肩に香色地に金箔散らしの紙に「詠歌一体」と記す紙題簽を付す。見返し銀箔。これは後補になり、本来は茶色紙表紙、左肩に題簽の跡がある。袋綴。料紙は薄様。墨付二〇丁、尾に遊紙二丁。一面九行、二三字程。奥に「此一帖者三代宗匠大納言為家卿之所作也彼以自筆本参議為数卿書写之以後彼所書写校合也尤可為証本歟但三鳥則鳥正与成馬云々必須在其錯也見者真偏之矣 貞治四年五月廿四日」と記している。貞治四―一三四八―年は北朝の年号。「為数」は、「為敦」の誤まりだとすれば、『太平記』卷四十「中殿御会事」に名をみせる、中務少輔藤原為量の子で、八条為敦(従三位で、応永九―一四〇六―年没)かとも考えられるが、『尊卑分脈』に「五十八入滅」とある記事が正しければ、合致しない。猶、為数なる人物は不明。あるいは、為数は為量か、本書は『八雲口伝』ともいい藤原為家の著作である。異説もあるが、文永―一二六四―一二七五―末年頃、子の為相への庭訓として成ったとされる。本書の内容は伝本により広略にわかれ、広本の内容は、稽古を強調する序につづき「題をよくよく心得べき事」「歌の姿の事」「歌にはよせあるがよき事」「文字の余る事」「重ね詞の事」等、八ヶ条について説く。猶、略本は広本以後の成立とされる。

24 詠歌制詞(宝暦八―一七五八―年奥書写) 縦一九・七×横一三・二 一冊

1118

美濃紙の表紙に「詠歌制詞」と直書する。仮綴。料紙は薄様。墨付二二丁、遊紙首尾各一丁。一面七行、一行二

○字程、一首二行書き。奥に「這一冊者元來二三寸はかりなる無外題之小本也桜町院仰云往年靈元院宸翰を染られし一冊也ところ／＼御幸のおりなと御懷中ありしとなんあらたに可書写のよし蒙仰謹うけ給やかて書付て献上畢此つゝて拝借の事をねかひて借下られ書とよめぬ制禁覺悟の大綱此一冊にこもれり座右をはなたす尤なをさりにおもふへからさるものなり」。次に「宝曆八年仲春 光胤」、そして「資枝」と記されている。朱で合点等が記されている。内容は為家の著『詠歌一体』（乙本）を増補し、中世以来の制詞（ある個人の創造した詞として、他人の使用を許さぬ制禁の詞）の集成を試みたもの。靈元帝の著の如きで、寛文から天和貞享の間に作られたと『日本文学評論史』近世・近代篇で久松博士は推定されている。

25 三秘抄（江戸中期写）縦二七・八×横二〇・四 一冊

1157

紺の紙表紙。左肩に薄標で紅葉流しを描く白紙題簽に「三秘抄 全」と記す。袋綴。料紙は楮紙。墨付八五丁。一面一一行、一首一行書き。朱で合点が入る、内題は「古今集聞書」「後撰集聞書」「拾遺集聞書」と記す。奥に「右此三冊古今後撰拾遺為家卿聞書号三秘抄／申請長岡中書御所持幽齋尊翁御自筆之本元和元年仲冬下旬卓筆凌老眼之不堪明年二月下五日／書功畢恐者可為証本務々不可免他見者也／佐方吉右衛門入道 宗佐判」とある。長岡中書は、細川忠興に長岡氏を授かった中院通勝の子、与九郎であろうか。宗佐は、「細川玄旨法印内佐方」（頭伝銘名録）とある人。本書は為家に仮託された偽書であるとする説が有力らしい。伝本としては、同奥書を持つ本、神宮文庫本、彰考館蔵本、九州大学細川文庫本、の他に宮内庁書陵部の蔵本が知られる程度であるようだ。

26 竹園抄（鎌倉後期写）縦横一六・〇の楕型本 一冊

11128

縹色地に金で花紋繫ぎを織る金襴表紙。内題、尾題に「竹苑抄」とある。列帖装。料紙は鳥の子。墨付三六丁。首一丁、尾二丁の遊紙。一面一一行、一行一四字程。極札が付され「竹苑抄御子左右少将為実朝臣 二条家為実朝

臣「竹苑抄」と記し「琴山」の印のあるもの。為実というのは伝承にすぎないが、現存写本中最古のものである。猶、今川了俊『落書露頭』に「かの奥書をみるに、為実朝臣の、たれやらん法師にあたへられたる歟。」と記されていることにより、為氏の子為実を『竹園抄』の作者とする説も行われているが、一般には、為家の説をその子為頭が聞書きしたものとされている。

27 竹園抄(天文六一一五三七一年以前写)縦二〇・一×横一四・七 一冊

11 129

本来の表紙は剥脱し、破損部を香色紙で補修した料紙共紙の表紙である。表紙下部に「伝長胤□千代」と記す。列帖装。料紙は楮紙。墨付三〇丁。一面九行、一行一五字程。卷末に「天文六年丁酉神無月日 虎千代」とあるのは別筆で伝領奥書きとみられる。また、裏見返しには「多福院 虎千世丸」とも記されている。右にみえる長胤は「東坊城三木長遠(新統古今作者)の庶子」(頭伝銘名録)でもあろうか。他に「月明荘」の印記がある。猶、竹園抄は、一、可_レ嫌_レ病事 二、可_レ対_レ詞之事 三、親疎句之事 四、六義之事 五、取_ニ本歌_一体之事 六、返事体之事 七、題存知之事 八、懐紙可_レ書事 九、披講座席之事 十、於_ニ名物_一題存知之事 十一、風体之事の十一条項よりなるのが通例の内容である。

28 竹園抄(室町後期写)縦二五・八×横一七・二 一冊

11 13

紺青地に鬱金で縦四、横上部二の帯線で区切り鶴丸、梅菊紋を織る鍛子表紙。題簽なく目録部に「竹園抄」と記す。列帖装。料紙は鳥の子。墨付二七丁。一面九行、一行二〇字程。奥に「文明十九年正月十日終功此一冊 按察使藤原親_{御判}有之」と記し、裏に「主□□千羈丸」とある。本書は、「凡這抄は……号竹園抄なり」との奥書部分を持たないが、目録部に「八雲御抄より集也 竹の園にて御子に訓給へる為家の 言葉也以竹園と号なり」と記している。また少しく助辞等の省略がみられ、簡略をはかったものと思われる。ただし、意を異にすることはない。奥書

の文明十九（一四八七）年……藤原親（甘露寺親長）は、この本の親本の奥書である。

29 竹園抄（天正一三—一五八五年写）縦二六・九×横一九・九 一冊

11 18

青鼠地の紙表紙。左に「里村玄仍筆連歌」と直書する。目録部に「竹苑抄」とあり。列帖装。料紙は鳥の子。表打ち改装になる。墨付二六丁。一面一一行、一行一九字程。奥に「天正拾参年卯月七日 玄仍（花押）」と記される。一丁表に付される極札に「里村玄仍竹苑抄一冊一歌に可病事有名判」と記し「琴山」の墨印を押す。天正十三（一五八五年）、里村玄仍筆は認められるべきところか。猶、本書も一般に見られる奥書はなく、前書同様に目録部に「八雲抄の中より集成 たけのそのにて子息にをしへたまへる為家卿詞也仍号竹苑」と記している。印記は他に「月明荘」のものがある。

30 竹園抄（寛永二一—一六四四年刊）縦二七・八×横一八・四 一冊

11 16

牡丹に雷紋繋ぎの空押しのある丹表紙。左肩に「竹園抄」の題簽あり。袋綴。料紙は楮紙。全三四丁。一面九行一行二〇字。四周单边匡郭内一九・二×一五・七。柱刻は「竹園抄 一（〜三十四）」とある。刊記は「寛永甲申暮秋上旬刊行」とある。寛永二一年刊本だが、その奥書は「凡這抄ハ最極秘事の雖口伝初心のために書をく処也為顯入道殿小童の時竹園にてをしへ給へる民部卿入道殿の言葉を為顯殿のかきあつめ給ふなり世間に未披露物也穴賢不可有外見可秘竹の苑にて御子にをしへ給へる為家の詞なり仍号竹園抄者なり」とある。猶、通常、寛永刊本の刊記は「寛永廿一甲無射吉辰 二条通松屋町 武村市兵衛刊行」とあるはずで、本刊本は、刷り、紙質からも刊記を替えての後刷本と思われる。

31 竹園抄（慶安三—一六五一年写）縦二六・一×横一九・二 一冊

11 15

白地に雲母引き、墨流しに桜花散らしの紙表紙。左肩に「竹園抄」と直書する。袋綴。料紙は薄様。墨付二二

丁。一面一二行、一行二二字程、和歌二字下げ。朱で合点等が入る。奥に「慶安三庚歲孟夏上旬写之」とあり最終丁に「僻字つかひてにをは文字等御ほんにすこしもちかへすこれをうつし侍るされとあく筆しかのみならずかやうのもしほ草はかきもならはぬのみなればさためて なにはの事も あしくこそ侍らめと 御はつかしく」と記している。印記は他に「閑雅文庫」「下野之利五箇莊新田」／安田佐右衛門図書記」がある。本書は、冒頭に月の異名を記す他、かなりの増補がなされている反面、対詞事の「ほのく」とから「さくら花……」の部分省き、和歌講作法の図を省く等、かなり改変された本文ということができそうである。

32 竹園抄（延宝七—一六七九—年写）縦二六・五×横一八・九 一冊

11 14

紺地に雷紋繫ぎに唐草の空押しのある紙表紙。左肩に「竹苑抄」と記す後補の素紙題簽を付す。見返しに「竹園抄」、その左下に「芳春院玉堂（墨印）」と記す。袋綴。料紙は楮紙。墨付三九丁。一面八行、一行二〇字程。奥書は「凡這抄八……」とあるものの次丁に「延宝七年己暮秋下旬書之写者也／愚筆雖在憚俗人之命書之本の儘落字かな文字等以如件／あらさらん我後世そおもはるゝ／なからの橋も名のみ残れば」と記す。印記は他に「川口文庫」等のものがある。内容は、十一ヶ条、目録を欠くのみで、寛永板本と同じである。

33 竹園抄（江戸中期写）縦二〇・一×横一三・七 一冊

11 12

紺地、中央に絹紙に「竹園抄」と記す題簽を貼る。更に後補の四菱撫子繫ぎを織る紺青の絹地、中央に雲母引きの無記題簽のある覆い表紙を付す。袋綴。料紙は楮紙。墨付四九丁。一面七行、一行二〇字程。内容は、目録、十一ヶ条につづき「是に秘事なる初心の者のためなりゆめ／＼人に見すへからず為頭入道殿小童之時竹の林にて父のをしへ給へる言を書つめ給ふものなり世間にひろまらざる事なり 為家 為頭 能恭 空恵 四代なり」と記し、

「座席事図ア楽なり」とあり右に「此一ヶ条比本ノ目録ニハアレトモ一条全分脱落スル故ニ依ニ印本一書卷末入ニ加

之也。」として、「和歌講作法」中の図に続いて「さて会の集会席にのそまんには面々つねのつほをそんじて……」の一条を付加している。全体に朱で校合がなされているが、この朱は流布の本に依拠するものの如しである。印記は他に一つあり。

34 竹園抄（嘉永七—一八五四—年写）縦一六・四×横一七・四 一冊

11 17

蘇芳色布目地桜紋を空押しする紙表紙。左肩に「秘竹園抄／詠歌制詞」と直書する。また右方に素紙に「三千二百八十五号／文庫入拾三点ノ内」と記し貼付。列帖装。料紙は三楹。墨付六二丁、一面九行、一行一六字程。但、後半に「詠歌制詞」を合綴する。竹園抄の末には、流布の奥書の後に「此本書林五六冊之本の一物也説光政卿許借格別懇本以老眼拙筆写之納秘底文字難解処ハ宝曆板行冊ニ而訂考畢 嘉永七年七月日 関白（花押）」と記す。鷹司政通（当時六六歳）が烏丸光政の本によって写したのであった。印記は他に「鷹司城南館図書印」がある。

(三) 仮託偽書

35 和歌肝要（正徳三—一七一三—年写）縦二〇・一×横一四 一冊

11 22

藤原俊成仮託の偽書。紺地の紙表紙。左肩に「和歌肝要 近代秀歌／毎月抄 詠歌一躰／夜靄 家隆口伝／後鳥羽院御口伝 為家庭訓／耕雲口伝 桂明抄」と記す丹色紙の題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。墨付九〇丁、一面一行、一行二八字程。卷末に「于時正徳三癸巳年五月廿二日」（印記）と記す。外題の如く十作品の合綴になるもので、印記は他に、「和学講談所」「温故堂文庫」「久曾神蔵書」がある。猶『和歌肝要』諸本奥書にある永仁四—

一二九六〇年の、理達（俊成の兄忠成の曾孫光成の子）の奥書は偽作ではないので、成立はそれ以前、鎌倉中末期頃かとされる。内容はおおよそ、詠歌論・歌体論・歌病論からなる零細なもので新鮮味に欠けるが、『和歌大綱』を成立させる母胎となっている作である。

36 悦目抄（室町末期写）縦二五・四×横一九・九 一冊

1154

基俊に仮託された偽書。紺表紙。左肩に「冷泉家秘書」と記す題簽を付す。また扉に「冷泉院秘書 一冊」と直書。袋綴。料紙は楮紙。墨付五〇丁。一面九行、一行二二字程。若干の傍注と、ほとんどの漢字に読み仮名を付している。奥書は「右秘書者愚老以一身之才所注置也……（略）……」とある「大宮右大臣俊家卿息也／左衛門佐基俊」（傍線部が『歌学大系』所収本と異なる）のもの、俊成のもの、「年来不浅比道に心さし……（略）……」とある「俊成卿女こしへの尼御前号九条殿御前／藤原氏女在判」のもの、「此秘書ハ子一人より外に……（略）……」弘安五年三月廿日 妙阿在判「秘書を相伝せんとて起請文をかき侍り努々人にかきうつさせゆるす事分ましくあなかしこく為氏在判」と閉じている。本書は基俊（秘）抄・鷺箱極秘抄・歌道秘書・更級記等と異称が多く、広・略異本も多い。

37 悦目抄（江戸中期写）縦二三・五×横一六・五 一冊

11105

横目香色の紙表紙。外題なし。扉、内題に「俊成卿女子相伝之書」また内題に「鷺箱極悉書」とある。袋綴。料紙は楮紙。墨付四四丁、遊紙一丁。一面十行、一行二二字程。奥に、「一、此書ハ以愚老才所注置也……（略）……年月日 前左衛門佐基俊 大宮左大臣家ノ息也 自師匠相伝之秘書一卷……（略）…… 尺阿判 五三位俊成 此書は家の人々もゆるさず余の家人は名をも不聞年来……（略）…… 嘉禄元年月日藤原氏判 五条三位女 こしへ入道御前 俊成卿女子相伝之一巻也 定家禅門羅以書也」とある。内容は、詠歌法・仮名遣・作歌心得・歌病・本歌取り・題詠・禁

制詞・歌体等多方面にわたり、神・仏道と歌道とを結びつける点に中世的色彩が認められる。これは『和歌大綱』を基に『俊頼髓腦』『八雲御抄』『十訓抄』等に拠ったとみられている。奥書は54書に見られる如く、基俊・俊成以下相伝の書としての体裁を有し、基本的に鎌倉末から室町期にかけての仮託書流行の風潮の中で生まれたものとみられている。また、105本は、嘉禄奥書を有するので、脱簡本系統のものと考えられていることは、奥書の無雑作な改変からも首肯できる。ともあれ、『和歌大綱』『悦目抄』、そして、『和歌無底抄』（悦目抄の増補敷衍本とされる）の三書の関わり等を梃に考察すべき多くの問題が残るとみられている。

38 愚見抄（天正一四―一五八六―年写）縦二八・〇×横二〇・四 一冊

1118

定家仮託偽書。鶯香色に千鳥に花を格子状に織る鍛子表紙。左肩に題簽の痕跡あり。内題に「愚見抄」とある。袋綴。料紙は楮紙。墨付四一丁。一面十一行、一行二〇字程。本書は、『桐火桶』『愚秘抄』『三五記』とともに、鶯鷺系偽書といわれるもの。これらは内容・成立事情ともに密接に関わりあうとみられている。その中でも、本書は早く冷泉派の歌論書に書名をみせることから、冷泉家に深い関わりを持って発生したろうとされる。内容は『毎月抄』の十体に写古・景曲・物哀・存直・行雲・廻雪・理世・撫民の八体を加えたもの、後半に作歌の心構え、西行・実朝・清輔・俊成を推賞し、学ぶべき例歌等を記す。有心体を中心と見るのは『毎月抄』と同様だが、幽玄体を行雲・廻雪体と結びつける点は『愚秘抄』『三五記』にうけつがれているとされている。

39 三五記（江戸中期写）縦二六・四×横一九・五 一冊

11121

定家仮託の偽書。紺地の紙表紙。外題はなく、内題に「三五記 鷺本（鷺末）」とある。袋綴。料紙は楮紙。墨付八六丁。一面九行、一行一六字程。巻末に「由比不求斎藤原演徴」とある。印記は他に、「由比」「琴松館」「藤原演徴」「的卿」とある。鶯鷺系偽書の一つ。成立については『毎月抄』に歌論書『明月記』の名称が登場し、本書

は、序文でそれらしく装っている風が認められているが、同書および内容上関連する『和歌密書』（書陵部蔵で『三五記』の母胎とみる説もある）や他の偽書との関係や、『愚見抄』から想定される『別本三五記』との関係などをめぐって諸説が出されている。本来上下は別で、ある時期に一書にまとめられたとみられること、鵜鷺系偽書に藤原為実が深く関係しているらしいこと等の指摘がある。

40 三五記（江戸中期 刊）縦二七・七×横一八・三 一冊

1120

鱗形の空押しのある紺地の表紙。左肩に四周双边に「三五記 鷺本全」と記す題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙。全九一丁。本文匡郭内一九・七×一五・三。一面十行、一行一七字程。柱刻は「鷺本 一（丁付）」「鷺末 一（丁付）」と記す。無刊記の本だが、依拠伝本の奥書がある。それは「建保五年九月五日記畢 遺老藤原朝臣定家在判 于時宝治元年十一月六日於京極宿跡書写畢 藤原朝臣為家在判 文永六年十二月七日被自筆本相伝畢 藤原朝臣為氏在判 永仁二年七月六日被自筆本相伝畢 藤原朝臣為実在判」とあるものである。本書は上下に分かれ「鷺本」「鷺末」とも呼ばれる。鵜鷺系偽書の一つで、上巻は拉鬼体を歌の中道とする考えを中心に三十体からなる歌体論、下巻は仏教的教説によって三十一字・五句・六義・六体などを説く。

41 愚秘抄（室町後期写）縦二一・八×横一五・六 一冊

1161

定家仮託偽書。紺地に金泥で柳・川・鵜飼を描く表紙。左肩に藍流しの白紙に「鵜の本末愚秘抄」と記す題簽を貼る。袋綴。料紙は美濃紙、裏打ちされている。墨付九二丁。末尾に六丁の遊紙。一面九行、一行一六字程。奥に「さみやみ大井河にくたす舟のもとす多は京極の黄門侍良のかきをけるとて或人うつして函の中に秘し侍るをねんころにかりとりてうつし侍りぬるこの書の事流たしく伝れる所にて尋ねしかはさるもの侍らすこの二の鳥は納物の名にてそ侍るかゝる書はいかにも為実卿謀書の中なとにやとそ侍りし猶秘蔵の故にや又誠にもこそしかあれと

もこのうちにおのつからおもひきたかはぬ事も侍れは更にすてはてんもとおほえて応安第二のとし神無月上の絃の比うつしおはりぬる」とありつづけて「不審繁多也展転書写之謬之先如本雖令書写愚筆又定而不可直也以証本可令校合者也 文明二年卯月廿九日終功畢」とあり、別筆で右の奥書右上に「○異本」また、右奥書に続けて「○于時建保五年十二月十七日記之畢 前中納言藤原朝臣定一判 以被自筆本書写校合一 大納言藤原朝臣為家判 弘安七年蒙兎書写一 権中納言藤原朝臣為氏一」と記す。異本奥書は、群書類従本奥書の前半に相当する。猶、本書は諸本間の本文内容、構成上に甚だしい相違があり、成長・増補の跡が認められている。大別して一卷本（歌学大系所収本）と、それから成長した二巻本（版本・群書類従本）とに分けられている。

42 愚秘抄（江戸中期写）縦二五・〇×横一七・〇 一冊

11 60

横目の青鼠地の紙表紙。左肩に「愚秘抄」と直書。目録には「愚秘抄鵜本」とある。袋綴、料紙は楮紙。墨付二八丁。首尾各一丁の遊紙。一面十行、一行二七字程。奥書の類はないが、末尾に「妙久定家御介マツ」と記される。本書は別称「鵜の本末」。鵜鷺系偽書の一つ。本書が出現する源として、阿仏尼が為家のもとから持ち出し、冷泉家に伝えた歌書中に「鵜鷺の書」が存在した、という北畠親房の『古今集序註』の所伝がある。『愚秘抄』の原型は「鵜の本」で、これに対応すべく「鵜の末」が後に偽作、増補されて一対となったらしい。「鵜の本」の実体は不明な部分が多いが、経信・俊頼系の偽書で反冷泉家的性格を持ち、二条派庶流の手になったものと考えられている。内容は、「毎月抄」を中心に、「西行上人談抄」「近代秀歌」「無名抄」などの影響もみられ、特に「行雲廻雪体」は正徹・心敬らによって定家歌論の中核に位置づけられ、多大な影響を与えた。

43 愚秘抄（江戸中期 刊）縦二七・七×横一八・四 一冊

11 119

鱗形の空押しのある紺地の表紙。左肩に四周双辺に「愚秘抄 鵜本全」と記す題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙。全

六八丁。本文匡郭内一九・九×一五・五。一面十行、一行一五字程。柱刻は「鶉本 一(丁付)」「鶉末 一(丁付)」と記す。無刊記の本である。奥に依拠伝本の奥書があり、それは「于時建保五年七月七日於住吉御前参籠之次聊所註付也且思道之故且懷子之源也仍陵老眼不堪宜愚意之浅旨耳 前中納言藤原朝臣定家在判本云 以彼自筆本于時宝治元年十月六日於北山亭書写畢 前大納言藤原朝臣為家在判于時以彼本弘長二年八月十一日相伝畢 前中納言藤原朝臣為氏在判 正応三年正月四日件本同京極菱門自筆本共相伝畢 待從藤原朝臣為実在判」とあるものである。

44 桐火桶 (承応二一六五三一年写) 縦一五・四×横二一・九 一冊

1169

定家仮託偽書。焦茶色の紙表紙。外題なく内題に「桐火桶」とある。袋綴。料紙は楮紙、裏打ちがなされている。墨付二七丁。一面一六行、一行一七字程。奥に「此桐火桶者京極黄門定家卿所作而和歌之骨髓也雖然希世見幸將正本令開板者也 于時寛永十五年九月吉辰 二条通 仁左衛門 于時承応式曆江城浅草旅宿にてうつし侍りぬ」とあり、寛永一五(一六三八)年刊本の写しであることがわかる。本書は鶉鷺系偽書の一つで『愚見抄』の一部を母胎として成ったものと推定されているが、一説に『愚見抄』『愚秘抄』『三五記』の補遺とする見方もある。内容、前半を模範とすべき万葉古今の例歌、後半に桐火桶逸話、人麻呂以下の秀歌例とその評、基俊から俊成への古今伝授のことなど歌仙批評を記す。『古来風躰抄』『毎月抄』を祖述する部分があり、歌体論を持たず、歌人批評が主である点が他の偽書群と異なるが、「古今の歌を本として、当世の風体をよそほひによみなすべし」の如き歌観は『愚見抄』と共通する。

45 桐火桶 (江戸中期写) 縦一八・二×横一七・九 一冊

1171

紺地に金箔で霞散らし金泥で秋草を描く紙表紙。題簽なく見返しは雷紋繋ぎの金箔。内題に「桐火桶」とある。列帖装。料紙は鳥の子。墨付二四丁。一面一三行、一行一六字程。奥に「藤原為繁朝臣 文安丁卯則書畢」と記

す。また、極札が付されており、それに「慶安元一覽 三条殿為繁卿(琴山の墨印)桐火桶全」と記されてもいる。本書の成立年代は不詳であるが、宗祇の『未来記雨中吟抄』に「かの愚見抄は桐火桶の類也」と記されており、室町中期以後ではあろう。伝本に「弘長二年……」とある成立年代を示唆する奥書の類は偽証とされ認められていない。

46 桐火桶 (宝永元—一七〇四年 刊) 縦二二・六×横一六・二 一冊

1070

白地に濃緑色の五三桐紋散らしの紙表紙。左肩に格子目の白紙に「桐火桶上下」と記す題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。本文匡郭内一八・五×一三・六。柱刻はない。また見開きの絵が八図ある。全四八丁。一面十行。一行二〇字程。奥に「宝永元年申五月日 書林 万屋清兵衛板」の刊記がある。印記は他に「菅園蔵書部」他一がある。本文には朱の合点、濁点の他、墨細字の頭、傍への書入れが若干ある。本書の諸本は二大別して考えられ一つは内閣文庫本(歌学大系本)、他は寛永板本以下の写本。前者は内容が多い(例えば歌仙評、末尾「あなやすの秘事なりとこそ」以下が加わる)といった特徴が指摘されている。

47 定家十鉢 (江戸前期写) 縦二・七九×横二・〇六 一冊

1165

香色の紙表紙。左肩に「定家十鉢 璣」と直書きにする。袋綴。料紙は楮紙、裏打ちがなされている。墨付三〇丁、一面十行、一首二行書き。頭に集付が記されている。奥書の類はない。印記は他に「加持井御文庫」「月明荘」等がある。目録には「五十八首幽玄様 二十一首長高様 四十一首有心様 二十六首事可然様 二十四首麗様 十首見様 三十一首面白様 二十九首濃様 二十六首有一節様 十二首拉鬼様」とあり、十体二八一首からなる。『毎月抄』に「勘^{かんが}へ申し候ひし十体」として示された和歌の様式分類に合致させて後人の撰んだものと考えてよさそうである。収載歌(歌学大系本二八六首)の約八割は『新古今和歌集』の入集歌で占められている。

48 未来記（江戸前期写）縦二二・七×横一七・五 一冊

11 31

定家仮託の偽書。青鼠色紙表紙が後補されているが、元表紙は料紙共紙。左肩に「未雨」と直書きされている。内題は「未来記」「雨中吟」と記す。袋綴。料紙は楮紙。裏打ちされている。墨付一五丁、遊紙首に一丁。一面一四行、一行二七字程。奥書の類はないが、元禄前後の書風と判断される。内容は本来「前和歌得業生柿本貫躬」の署名につづき春夏秋冬恋、各十首計五〇首の作例を掲げたものだが、本書は、各々に注が付されており、『未来記注』とでもいうべき性格のものである。また、その注には、後普光園撰政（二条良基）、頓阿、雅世の名がみえるので、そのあたりの聞き書きを材料としているものでもあろうか。猶、例歌は詠むべからざる歌であり、語句の意味不分明、珍奇に過ぎる表現等が雑然と並べられたものであるが、『雨中吟』と合して、和歌三部抄に数えられ、二条派末流に重んじられていた。しかし、明治以降に真偽が問題となり、現在では、阿仏尼の関東での偽作説も行われている。

49 雨中吟（江戸中期写）縦二七・二×横一八・五 一冊

11 32

定家仮託偽書。料紙共紙の表紙である。左肩に「雨中吟全」と直書きする。仮綴。料紙は若干斐の入る楮紙。墨付二二丁。一面十行、一行二三字程。奥書の類はない。本来、末尾に「此風体をさかりに好み詠まむ時は歌の道はやくすたるへき世いたれりとなむ知るへしゆめくまなぶべからざる風体也此頃もかやうの姿おのづから見え侍りし仍後学の為にするしとむるところ也 前中納言藤原朝臣判」と記し、十七首の例歌を記すものだが、本書は注が付され『雨中吟注』と呼ぶべきものである。その注は、冒頭「後陽成院の御抄にはく此十七首は未来記同前には侍れと前に此名を雨中吟と号する事……」と始め、末尾は「……此抄物往古よりあまねく世上に記し出たりといへとも心ことはの不宜事をのみしるして其心不分明今中院前内府公此抄物をつまひらかに記し給ふと云々」と閉じ

る。祇注（宗祇注）、或抄、後陽成院（未来記雨中吟鈔）、中院通茂（未来記雨中吟抄）を引く、近世期の著作である。猶、『雨中吟』は、『未来記』と共に、三部抄の一つとして聖徳太子の十七条の憲法をかたどる義と理解されていたもの。

(四) その他の中世歌論書

50 八雲御抄（江戸初期写）縦二七・六×横二二・二 一冊

1156

順徳天皇著。打曇りの香色地の紙表紙。左肩に「八雲抄三」と直書。袋綴。料紙は楮紙。裏打ちされている。墨付一〇一丁。一面一一行、一行二一字程。奥に「本云正和四年七月九日書写了比本不審多可勘云々 一本云弘安十年冬十一月戊子朔丁未以巫相律徳本校合畢今月初順徳院宸筆御本数人写之彼本記忌之間不為校合仍以比本所校合也相違事多々何是非不可明必正本重可令校合今混乱之所々為令合別私未点者也 正応三年七月十三日書写了 権律師玄覚 両本奥書注了比両本何不審多然而不審之所両本共書之一本者朱書也猶以正本可勘之」と記す。内容は目録に曰「八雲抄卷第三 枝葉部 天象・時節 地儀・居所・草・木・鳥・獸・虫・魚・人倫・人事・衣食・雜物・異名・権化」である。猶、本書は六部六卷（正義・作法・枝葉・言語・名所・用意）の内の一。草稿本は承久の乱（一二二二年）頃の成立とされる。

51 和歌口伝（江戸中期写）縦二七・二×二一・三 一冊

1194

藤原家隆に仮託された偽書。刷毛目格子の渋引き表紙。左肩に「和歌口伝等」右下に「明治四十年三月十八日佐

藤蒼到君よりの惠贈として牧氏より受領書 檜垣の翁」と直書する。仮綴。料紙は楮紙。墨付三三丁。一面十一行一行二十六字程。また目録の部分に「一、家隆卿五事 二、後鳥羽院遠所御書 奥書葵花園上人は頼阿の事也 三、俊成卿女消息 越部禅尼と号 追加は慶融の聞書也頼宗ニ伝ル歟 四、庭訓抄二条家の書也 五、和歌用意 同断」と記している。以上の如く、本書は五作品を合綴するものであるがに冒頭の「家隆卿五事」が内題にもある「和歌口伝等」に合致するものの如くである。この部分の末尾は「和歌口伝 権中納言藤原家隆作 此抄ハ家隆卿御 説伝奉所也雖為片時他人之手不可渡是先師作也 建久三年七月日 大中臣忠光在判」と記す。また巻末に「這一冊可謂哥道之重宝且所々加校合畢 元禄七年正月十八日 参議左中將」とあり、また別筆で「此書者昭和癸丑歲於某書肆購之 久曾神昇識之」ともある。印記は他に「希世」等五種ある。本書の書写は、元禄を若干下る頃とみてよろう。猶、内容は、巻頭の序に次いで、歌仙・心所詮・五句の名と題す三箇条から成り、歌道仏道一如觀をはじめ『竹園抄』が注目する親句・疎句に触れるなど、鎌倉末期の諸書に通ずるもの。

52

延慶兩卿訴陳狀（江戸末期写）縦二七・五×横一九・八 一冊

1149

二条為世著。渋刷毛引の紙表紙。中央に「延慶兩卿訴陳狀」（一部破損）と記す白紙題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙。墨付二五丁。一面九行（序は一八行）。一行一九字程。奥に「右一卷為世卿 奏狀摘要抄之所謂同狀者則為兼卿申詞也為^{本如}後見之蒙聊記此旨而已^{本ノマ、}是^{本ノマ、}台藤臣判 本云 此本者連哥師宗祇右筆宗梅手跡西三条逍遙院奥書在一軸借出令書写畢」と記す。本書は『玉葉和歌集』の撰者をめぐっての為家（二条）と為兼（京極）との間に繰り返された論争を伝えるものである。伏見院下命で為世・為兼・隆博・雅有を撰者とする計画が中絶した後も、為兼が準備を進め、再開時に為兼の「一身奏覽」となったことへの為世の三回にわたる訴陳、為兼の反駁が内容である。猶、現在伝わるものは三回目^の為世の訴狀であるが、当時の歌壇情況を如実に語る好資料となっている。

53 井蛙抄（江戸初期写）縦二六・四×横二〇・三 一冊

11 82

頓阿著。紺地の紙表紙。左肩に「井蛙抄 上中下」と記す上部鬱金模様に入る白紙題簽を付す。袋綴。料紙は若干斐の入る楮紙。墨付一二一丁、首尾遊紙各一丁。一面一二行、一行二三字程まで、一首二行書き。奥に「右此一部当家注為秘説依懇切令校法橋兼載畢努々不可有外見者也 明応七年三月三日 法印堯恵 藤坊 校合畢」と記されている。印記は、他に「月明荘」のものがある。本書は本来六巻で、巻一、風体事、巻二、取本歌事、巻三、制詞事、巻四、同名々所、巻五、同類事、巻六、雑談からなる。巻一と五は、各事項内の関連する歌学書、歌合判詞、例歌を列挙した資料帳的性格を、巻六は、為世・為藤など、当代有力歌人からの聞書からなる。伝本は、巻六を中心に区々に分かれ、項目数から四種程に分類されているが、今後の検討を必要とする部分も少なくない。

54 愚問賢註（江戸前期写）縦二四・六×横一七・九 一冊

11 87

二条良基著。淡紺地に金箔で雲霞、金泥で松・柳・水草を描く紙表紙。左肩に金泥で秋草を描く白紙に「愚問賢註」と記す題簽を貼る。見返し金箔。列帖装。料紙は鳥の子。墨付三三丁。尾六丁遊紙。一面十一行、一行一五字程。奥に「貞治第二之曆姑洗強半之春為消永日之懶睡不顧後時之傍觀録一通遺頓公昔京極黃門禪門探得頭昭古今自秘密勘加斯道之奥旨号曰頭註密勘今拳短慮之愚問忽擊数篇之群蒙逃啻達天聽剩又征夷大將軍被翫賞之下俚之間博聞之答似以狗統紹故銘愚問賢注而已 五湖釣翁御判」とあり、良基の間に対し頓阿が注を加えたものを、謙遜の意を込めて良基（五湖釣翁）が愚問賢注と名づけたのである。成立は貞治二年姑洗で正平十八（一二六三）年三月だとわかる。内容は、本質論・風体論・心詞論・本歌取・制詞・詠作・題詞・特殊歌・歌病・文字余など二九条からなる問答である。

55 愚問賢註（江戸前期写）縦二三・二×横一六・八 一冊

11 88

料紙共紙の表紙。左肩に「愚問賢注」と直書する。仮綴。料紙は厚手の楮紙。墨付三〇丁。首尾遊紙各一丁。一面九行、一行二二字程。54に記した奥書「五湖釣翁」の右上に「二条殿 三位殿御事也」と記し訓点が入るが同一のものに続けて次丁に「惟時慶旋蒙 姑洗中澣単関 筆者礪斎 六十八歳云々」とある。「旋蒙」は「乙」、「単関」は「卯」の異名である。上の「慶」は「慶長」「慶安」あたりが考えられるが、「慶安」は該当せず、「慶長」の末年、二〇一―一六一五年が「乙卯」である。改元が七月一三日、よって「姑洗中澣」の三月なら慶長年中である。筆者の礪斎は未勘だが、慶長二十年の写、たぶんその再写かと思われる。

56 正徹物語（室町末期写）縦二一・九×横一五・〇 一冊

11 29

香色地に雲母で唐草を捺した紙表紙。左肩に白紙に同じく亀甲繫ぎを描き「正徹日記」と記す題簽を付す。列帖装。料紙は鳥の子、表打ちがされている。墨付九三丁、尾に遊紙二丁。一面九行、一行一七字程。奥に「右這一冊 東素珊以自筆本書写畢」とある。また人名・歌題等に朱点を付し、所々本文をミセケチにして改めた所がある。東素珊は、東常縁の甥であり、正徹の許に常縁と出入していたので原形に近い本文かと推定されて日本古典文学大系の『歌論集』所収本の底本に用いられた。猶、本書は、室町初期の歌僧正徹の歌論書で、前半を「徹書記物語」、後半を「清巖茶話」とする伝本もあり、前半を正徹自筆、後半は聞書、両者とも聞書（前半正広、後半蟠川智蘊又はその子親元筆録説等）とみる説に分かれ、両者を分かつか否かに説が対立している。成立に関しても、文安五一―一四四八年、宝徳二―一四五〇年の両説がある。

57 正徹物語（江戸初期写）縦二三・五×横一六・八 一冊

11 28

紺地に金泥で雲・家・松等を描く紙表紙。中央に金泥で草木を描く白紙に「正徹物語」と記す題簽を付す。見返しも赤・青・金泥で雲に秋草模様を描く。列帖葉。料紙は鳥の子。墨付七五丁。尾十丁遊紙。一面十行、一行一八

字程。奥に「本云右這一冊東素珊以宸筆本書写畢 于時永正十二天閏十月廿三日」と記している。前の東素珊本を更に永正十四（一五一七）年に写した本転写本である。本書のは、「歌道において定家を難ぜむ輩は冥加もあるべからず。罰をかうぶるべきことなり」との冒頭の定家崇拜宣言に始まり、和歌の風体、注釈、歌人の逸話など、長短約二一〇項目ほどを簡条書に記したものを内容とする。冒頭は当時二条家が為家以後を模範として、定家を敬遠していたことへの反発ともみられる。また歌論中、幽玄体論は注目されており、行雲廻雪体を無上の歌とする見解は、中世の美的理念の根幹をなすものとされている。

58 正徹物語（寛文二一―一六六二―年写）縦一九・六×横一三・五 一冊

11 26

薄鶯色地に表は梅に竹、裏は松に竹を描く紙表紙。外題はなく内題に「徹書記」とある。袋綴。料紙は楮紙。墨付二七丁。一面十行、一行二〇字程。奥に「是は和歌の大事大秘事也彼翁自筆の記をうつし再三校合せし者也 寛文二年十一月十七日 藤原若水」と記す。猶本書の伝本は、「正徹物語」の諸本として東素珊本が中心に考えられ「徹書記物語」の諸本はA本―神宮文庫系統、B本―書陵部本系統、C本―抄略本系統に区分、「清巖茶話」の諸本（久松博士の調査された本は、いずれも正徹物語下にある十四項が欠け、清輔云々からはじまっている）と、前半のみ後半のみ、全体の三様の伝わり方をしている。そして、諸本各段に出入も認められている（正徹歌論考）

『慶応義塾創立百年記念論文集、文学・国文学』昭33・11）。

59 正徹物語（元禄七―一六九四―年写）縦二六・〇×横一九・一 一冊

11 25

朽葉色紙表紙。中央にもと桃色紙に「徹書記物語」と記す題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙、裏打ちがなされている。内題は「徹書記物語上（下）」とある。墨付二〇丁、一面一三行、一行三二字程。奥に「夫古也無板刻皆自手録 今也転相摹刻而諸子百家之藏書漫及于宇宙以此無匡衡之庸作精勤無王充之閱市勉勵空挿万軸而已豈不悼哉予公事之

余暇繙囊帙嚙其藏否揆度其正偽則殆忘寢食此所謂独樂者也徹書記物語已行于世而移星霜久矣一日吟誦無數終手寫之而充精舍之慰倦或人笑曰何故摹之哉為希書則可也舍之而學他必有益矣予曰吾子勿謂古語云讀書不如寫書夫此謂乎嫌其細瑣麼少而不錄數則終不得刮垢磨光業患不能精信哉吾於韓愈得其実矣傍人唯々而退於于茲跋 元禄七載秋七月二十有七日 尚書郎藤原（「輝光」の横型朱陰刻）」とある。寛文二年刊本や神宮文庫本と同系統（A系統）の本で、正徹物語にある十段は存在しない。

60 正徹物語（文政二—一八一九—年写）縦二三・三×横一六・六 一冊

11 27

朽葉色の紙表紙左肩に「徹書記物語乾坤」と直書する。袋綴。料紙は楮紙。墨付五七丁。一面一二行、一行二四字程。奥に「此書高経草の秘蔵を望うけてうつし置もの也落行誤字は其まゝに写また写し取ときの手柄もあへし文政二卯年六月 勝野昌熹（花押） 行年七十三（「勝野昌熹」の朱印記）」と記す。印記は他に「久曾神蔵書」等五種を認む。上下にわかれており、A系統の本文と見られている。

61 古今伝授切紙口伝（江戸後期写）縦二三・一×横一六・六 一冊

11 93

青鼠色の後補の紙表紙。旧表紙は、料紙共紙で左肩に「古今伝授切紙之口伝」、やや右下に「種玉菴宗祇著」と直書する。仮綴、料紙は楮紙、裏打ちされている。墨付一六丁。一面一一行、一行二三字程。奥書の類はない。内容、宗祇流の「古今伝授切紙口伝条々」と称されるものと、諸書の抜書からなる。前者は、内題（外題に同じ）のあと「三之伝授之内」と記し、「三鳥三木」から「三人翁」までを記している。各項の後に増補部分があるが、それは主に各秘事の典拠を示す例歌を記している。後者は、明智軍記から抜粋した狂歌、吉宗公將軍宣下の宣命、楠画讚、弓削宮碑、義農之基碑、壺の石碑、伊余の湯に読む歌他、一首十体歌、六玉川、東琴の実体、出雲国三種律姫歌等十数項目からなっている。

62 幽齋聞書和歌雜集之拔書（江戸中期写）縦二七・八×横一六・六 一冊

11 96

30

青鼠色の後補表紙。旧表紙は、料紙共紙で中央に「幽齋聞書和歌雜集之内拔書」と直書する。仮綴。料紙は楮紙。墨付二〇丁、一面九行、一行二三字程。奥書の類はない。内容は「短哥の事 宗祇より東野州に尋たる返札の中に……」と始め、旋頭歌、根本歌、恋の歌、俳偕歌の事、述懐の歌の事、色紙書様の事を記していくが、その末に「引書之勘弁」として、「一、和哥式定家 一、和哥庭訓定家 一、正風躰抄定家 一、八雲口伝為家 一、和哥口伝四条局阿仏 為家妻 一、近来風躰二条良基 右名六部抄 一、古今序 一、古今聞書 一、八雲御抄順徳院 御作七卷 一、竹園抄民部入道ノ詞を 為頭殿集也 一、眼底記玄旨ノ詞 光広大納言殿集 一、悦目抄基俊 一、筆法論備前守惟中」とある。量的に多い「色紙の書様の事」は、『竹園抄』中の「懐紙書事」「和歌講作法」を全引するといった事がなされる。次に「六歌仙」「十躰和歌」を記している。

63 細川幽齋聞書（寛文五—一六六五—年刊）縦二六・九×横一七・六 二冊

11 91

紺地の紙表紙。左肩に四周双辺の白紙に「細川幽齋聞書上下」と記す題簽を付す。袋綴。料紙は楮紙。上冊全四四丁、下冊三三丁。一面一一行、一行二〇字程。和歌一字、注二字下げ。柱に「聞書上(下) 一(丁付)」と記す。下冊奥に「寛文五年乙巳正月吉日 中野市左衛門板行」の刊記がある。印記は他に「下田氏記」等がある。佐方宗佐の序につづき、目録、本文の順に記されているが、その内容は、「一、題の哥の事 二、本哥可取やうの事 三、本哥不吉の哥不可取事 四、風躰の事 五、晴の哥の事 六、哥合の哥の事 七、哥の地後の事 八、哥の病の事 九、字余の事 十、哥程拍子の事 十一、贈答の哥の事 十二、必詞何を先とすへきやの事 十三、親句疎句の事 十四、隔句の事 十五、秀句の事 十六、十躰の事 十七、六義の事(略之) 十八、哥に続問敷詞の事 十九、名所の哥の事 廿、哥に必きるゝ所有事 廿一、対語の事……」等 四十項目からなっている。前著との関係

は、あまり見出せない。

64 柿本備材抄（安土桃山頃写）縦二五・〇×横一八・三） 一冊

1195

薄香色地の後補の紙表紙。旧表紙は料紙共紙で、左肩に小豆色の後補の題簽を付し「柿本備材抄 全」と記し、その右には「古写本前大僧正良鎮書」と直書されているのは古色がある。袋綴。料紙は楮紙。墨付五八丁。一面一行、一行二六字程。奥に「尋申入候哉分歟題目類集之重而可清書者也 桃竹隠士良鎮 雖為新写本附屬藤弘春堅可禁外見者也 前大僧正」と記す。良鎮は天台宗曼殊院卅四代の門跡で、永正十三（一五一六）年十月四日寂、一条殿成恩寺関白左大臣経嗣公息であり、桃竹隠士は、曼殊院「世号竹裡門跡」による命名であろうか。本書は、その転写本で良鎮書は従えない。内容は、百和香のこと、題次第、古今銘、百首歌、歌稽古、歌詠みやう、代々集のこと、新古今集不審和歌会次第、三多三盗三易等からなる。「三条西実教の説によれば冷泉家の作といふ。寛文九年中村五兵衛刊行。」（大日本歌書総覧）

久松家寄託資料について

故久松潜一博士（明治27年生まれ昭和51年没）の御遺志により久松家の寄託を受けて国文学研究資料館に所蔵しているコレクションで、中古から近世にかけての歌学歌論書計一二九点一五〇冊よりなる。

内容の詳細については一覽に譲るが、一〇四点が写本（新写本を含む）であり、二二点が版本、ほかに、謄写本二点・複写製本一点がある。

このうち、全体の八割以上を占める写本の中核をなすのが中世歌論書であり、鎌倉後期写本をはじめとして古写本も多く、久松博士の歌論研究の基礎をなしたテキストである。

関連著作としては、『日本歌論史の研究』（風間書房 昭和38年刊）などがまとめられており、『日本文学評論史』（全5巻 至文堂 昭和23〜25年刊）においても随所で言及されている。また、『日本古典文学大系65 歌論集能楽論集』（岩波書店 昭和36年刊）の「歌論集」の校註は、これらの善本によって行われたものである。

コレクション資料は、昭和52年からの寄託分一〇二点（一二三冊）に、昭和57年になって二七点（二七冊）が追加寄託となったが、あわせて所蔵貴重書に準じた扱いで利用に供している。

所蔵目録としても、『国文学研究資料館蔵和古書目録 一九七二―一九八一』（当初寄託分）および『同 増加1（一九

八二）』（追加寄託分）に、謄写本等を除く写本・版本の全点が収載されている。

なお、これまでの特別展示においても、コレクション資料の幾分かを紹介してきた（第3回・第6回・第7回など）が、久松家寄託資料のコレクションのみを扱った展示としては、今回（第13回）が初めてである。

久松家寄託資料一覧

〔凡例〕

一、この一覧は、国文学研究資料館所蔵の久松家寄託資料全一二九点（一五〇冊）を収録したものである。ただし、複数著作の合写本等をそれぞれの書名項目に重複してとりあげているため、掲載項目としての書名点数は一九五点である。

一、排列は、書名の五十音順とした。同著作については、写本・版本の順とし、それぞれ書写年・刊年順に排列した。書写年・刊年不明のものは、それぞれの後へ並べた（請求番号順）。

一、記載は、書名・著者名・刊写の別・請求番号を基本とした簡略記入である。

冊数は、一冊本はすべて省略し、二冊以上のもののみ明記した。

複製著作の合写・合綴本は「合」で示した。

請求番号は、久松家寄託資料を表わす配架分類記号「11」と図書番号の組み合わせであるが、ここでは分類記号を省略し図書番号のみ表示した。

一、*印は、今回出展の資料を示す（本文解説あり）。

飛鳥井雅綱歌道伝授書（飛鳥井雅綱著 写）

あーえ

130

稲掛の君の御返事に更に答へまゐらする書（村田春海著 明治12年中尾五百樹写 合）

薄こほり（香川景樹判 刊）

歌会記録（明暦3年重綱写）

雨中吟（伝一藤原定家著 慶安4年度會貞末写 合）

同（写 合）

同（写）

同（刊 合）

詠歌一体（藤原為家著 正徳3年写 合）

同（写 和歌六部抄の内）

同（写）

詠歌制詞（嘉永7年写 合）

同（写）

詠歌大概（藤原定家著 延徳4年堯恵写 合）

同（慶安4年度會貞末写 合）

同（写 合）

同（写 合）

同（冷泉為秀写 合）

同（写 合）

同（写 合）

同（写 合）

詠歌大概聞書（後水尾天皇著 写 合）

* 5 * 113 * 111 * 110 * 109 * 108 * 3 * 2 * 10 * 107 * 8 * 17 * 117 * 116 * 22 * 33 * 32 * 31 * 10 * 59 * 42 * 68

兼載雜談(兼載述・兼純記 写)	45	三十六人歌合(写 合)	*	2
顯昭陳狀(顯昭著 写)	83	三体和歌(藤原定家ほか著 慶長7年写 合)	*	103
耕雲口伝(耕雲著 正徳3年写 合)	22	三秘抄(藤原為家著 写)	*	57
古今打聞(伝―凡河内躬恒著 写)	106	自讃歌(慶長7年写 合)	*	103
古今詠格調儀(写)	124	同(写)	*	46
古今伝授切紙口伝条々(宗祇著 写)	93	同(写)	*	102
古今和歌集新釈(藤井高尚著・藤井駿編 謄写)	101	秀歌躰大略(延徳4年堯惠写 合)	*	107
越部禪尼消息(藤原俊成女著 写 合)	94	同(慶安4年度會貞末写 合)	*	10
同(新写 合)	98	同(写 合)	*	2
国家八論(荷田在滿著・本居宣長評 明和5年本居舜庵写 合)	92	同(写 合)	*	3
国家八論斥非(大菅中養父著・本居宣長評 明和5年本居舜庵写 合)	92	同(写 合)	*	5
言靈辨(熊谷直好著 新写)	100	同(写 合)	*	108
後鳥羽院御口伝(後鳥羽天皇著 写 合)	19	同(冷泉為秀写 合)	*	109
同(写 合)	94	同(写 合)	*	110
同(新写 合)	98	正徹物語(正徹著 文政2年勝野昌憲写)	*	111
同(正徳3年写 合)	22	同(写)	*	27
古来風躰抄(藤原俊成著 写 2冊)	89	同(写)	*	28
同(写)	90	正風体抄(写 和歌六部抄の内)	*	29
ささめごと(心敬著 写)	43	新歌仙三十六人歌(写 合)	*	116
三五記(伝―藤原定家著 写)	121	新歌仙三十六人歌(写 合)	*	2
同(刊)	120	新三十六人歌合(写 合)	*	2

けし

新統歌仙 (元禄10年刊)	50	貫之集注 (香川景樹著 写)	34
井蛙抄 (頼阿著 寛政9年藤原教武写 3冊)	81	定家卿百首和歌 (藤原定家ほか著 慶長7年写 合)	103
同 (写)	82	徹書記物語 (正徹著 寛文2年藤原若水写)	26
清巖茶話 (正徹著 文政2年勝野昌憲写 正徹物語の内)	27	同 (元禄7年藤原輝光写)	25
同 (写 正徹物語の内)	28	同 (文政2年勝野昌憲写 正徹物語の内)	27
同 (写 正徹物語の内)	29	同 (写 正徹物語の内)	28
清話抄 (浅草庵守舎著 文政3年刊 2冊)	86	東塢亭話 (香川景樹述・児山紀成記 天保6年児山紀成写)	29
為尹千首 (冷泉為尹著 写)	64	桃岡雜記 (八田知紀著 刊)	52
竹園抄 (伝―藤原為顯著 天文6年虎千代写)	129	答問雜稿 (清水浜臣著 弘化5年吳竹園主人写 2冊)	66
同 (天正13年玄仍写)	18	時よことなる詞のしらべ (斎藤彦磨著 天保11年自筆)	85
同 (寛永21年刊)	16	俊頼髓腦 (源俊頼著 写 2冊)	38
同 (慶安3年写)	15	なしこ草 (村田春海著 明治12年中尾五百樹写)	84
同 (延宝7年写)	14	梨本集 (戸田茂睡著 刊 2冊)	68
同 (嘉永7年写 合)	17	新学異見 (香川景樹著 文政13年刊)	72
同 (写)	12	新学異見辨 (業合大枝著 刊)	40
同 (写)	13	二条家直伝 (文政10年蒼亭吾道写)	41
千種 (潮信子著 写)	128	耳底記 (細川幽齋述・烏丸広光記 刊 3冊)	36
同 (写 3冊)	23	野守鏡 (伝―六条有房著 元禄3年刊)	80
中古三十六人歌合 (後鳥羽天皇・藤原定家ほか著 写 合)	24	比那能歌語 (千家尊孫著 天保9年刊)	39
筑波問答 (二条良基著 写本の複写)	122	百人一首 (伝―藤原定家編 延徳4年堯惠写 合)	125
	2	同 (慶安4年度會貞末写 合)	107
	*		10

同(写 合) * 2
 百人一首燈(富士谷御杖著 藤原成元写) 123
 袋草紙(藤原清輔著 貞享2年刊 4冊) 79
 同(刊 4冊) 78
 藤川百首注(写) 114
 細川幽齋聞書(細川幽齋述・佐方之昌記 寛文5年刊 2冊) * 91
 毎月抄(藤原定家著 正徳3年写 合) * 22
 同(享保20年度會常彰写) * 20
 同(写 合) * 19
 同(写) * 21
 同(写 和歌六部抄の内) * 116
 同(写 合) * 127
 未来記(伝―藤原定家著 慶安4年度會貞末写 合) * 10
 同(写 合) * 31
 同(慶安3年刊 合) 33
 無言抄(応其著 写) 44
 八雲御抄(順徳天皇著 写) * 56
 幽齋聞書和歌雜集之内抜書(写) * 96
 夜の鶴(阿仏尼著 写 合) * 19
 同(写 和歌六部抄の内) * 116
 同(正徳3年写 合) * 22
 両大人贈答手簡(本居宣長・村田春海著 文政5年橘

重浪写) * 74
 悦目抄(写) * 54
 六条家抄(写 合) 47
 和歌肝要(伝―藤原俊成著 正徳3年写 合) * 22
 和歌口伝(伝―藤原家隆著 写 合) * 94
 同(新写 合) 98
 同(正徳3年写 合) * 22
 和歌九品(藤原公任著 写 合) * 127
 和歌十体(伝―藤原定家著 写) * 65
 同(写 合) * 113
 和歌庭訓(二条為世著 正徳3年写 合) * 22
 同(写 合) * 94
 同(新写 合) 98
 和歌の三重の大事(写 合) 47
 和歌法式(写) 104
 和歌用条々(伝―二条為世著 写 合) * 94
 同(新写 合) 98
 和歌六部抄(写) * 116
 或問(小沢蘆庵著 安政3年山本正雄写) 35

昭和57～58年度展示一覧

- 第16回常設展示 昭和57年5月7日（金）～7月10日（土）国文学研究資料館
展示室（以下同）
八犬伝とその周辺
- 第17回常設展示 7月19日（月）～8月26日（木）および
9月13日（月）～10月21日（木）
徒然草
- 第11回特別展示 9月2日（木）～8日（水）
新収資料展
- 創立十周年記念特別展示（通算第12回。史料館と共同開催）
10月29日（金）～11月13日（土）（29日は、記念式典と併催）
- 第18回常設展示 12月1日（水）～昭和58年3月24日（金）
江戸から明治へ
- 第19回常設展示 昭和58年4月11日（月）～6月25日（土）
日本古典文学史
- 第20回常設展示 7月4日（月）～9月29日（木）
史書と日記——古代・中世——
- 第21回常設展示 10月11日（火）～10月24日（月）および
11月18日（金）～12月26日（月）
近世前期の文学
- 第13回特別展示 11月1日（火）～15日（火）
中世歌論書展——久松家寄託資料——
-

『国文学研究資料館特別展示目録』既刊一覧

〔1〕開館特別展示目録

- 1 国学者自筆稿本と奈良絵本を中心として (昭和52年度・第1回特別展示)
- 2 久松博士蔵歌論書及び本館蔵国文学関係書を中心として (昭和52年度・第3回特別展示)
- 3 「古今集」初雁文庫を中心として (昭和53年度・第4回特別展示)
- 4 日本の絵本ならびに版本の挿絵 (昭和54年度・第5回特別展示)
- 5 館蔵貴重書展 (昭和55年度・第8回特別展示)
- 6 国学者自筆本と新収資料を中心として (昭和56年度・第10回特別展示)
- 7 新収資料展 (昭和57年度・第11回特別展示)

国文学研究資料館特別展示目録 8

中世歌論書展 — 久松家寄託資料 —

昭和五十八年十一月一日 発行

編集 国文学研究資料館

整理 閲覧部 参考室

発行 国文学研究資料館

〒142 東京都品川区豊町一―一六―一〇

TEL 〇三―七八五―七一三一

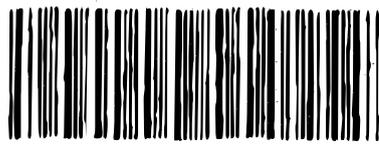
印刷・製本 株式会社 三協社

〒164 東京都中野区中央四―八一―九

TEL 〇三―三八三―七二八一

ISBN4-87592-008-3

国文学研究資料館



0088800167

ISBN4-87592-008-3